

## 令和4年度 第2回栃木市総合教育会議 会議録

1. 日 時 令和4年11月4日(金) 午前10時00分～午前11時03分

2. 場 所 栃木市役所 議会全員協議会室

3. 出席者

(構成員) 大川秀子 市長、青木千津子 教育長、福島鉄典 委員、西脇はるみ 委員、大橋孝子 委員、舘野知美 委員、林慶仁 委員

(事務局) 癸生川 総合政策部長、押山 総合政策課長、名淵 教育次長、金井 参事兼教育総務課長、他担当職員

4. 内 容

1 開 会

2 あいさつ

○大川市長

お忙しい中、第2回総合教育会議にご出席を賜りまして誠にありがとうございます。

秋は文化・芸術の秋といいますが、皆様には様々なイベントにご出席ご協力をいただきありがとうございます。

11月1日には栃木市立美術館を無事開館でき、11月3日の一般公開初日には、704名の一般来館者にご入場いただきました。多くの方に関心を持っていただけたのではないかと思います。

また、いちご一会とちぎ国体・とちぎ大会も無事終わることができました。多くの皆様に、また学校の生徒にも見ていただきました。とちぎ大会も10月29日から31日にかけて、本市でフライングディスクの競技が行われ、多くのボランティアスタッフにご協力をいただいた中、特に高校生には連日大勢ご協力いただき、いい経験になったのではないかと思います。大会関係者からも「競技で実力を発揮できるのは会場のスタッフによる部分が多く、特に栃木市は高校生の活躍が大きく、大変良かった。」と言っていたのはありがたいことです。記憶に残る国体が開催できたのではないかと思います。

本日は前回に引き続き第3期教育大綱と運動部活動の地域移行について協議していただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

3 協議・調整事項

(1) 第3期教育大綱の策定について

○事務局

※資料により説明

○大川市長

事務局より説明がありました。皆さんからご質問、ご意見をいただきたいと思

います。

○福島委員

希望やとちぎ愛の醸成の記載は栃木市の教育大綱としては非常に良い。小さいころから栃木市の良さを見つけていくのは良いことだと思う。止まってくれないキャンペーンもやってみてすぐ効果があった。まじめな県民性があるのでとちぎ愛の醸成と掲げて教育していくのは良い。

○市長

市外から引っ越してきた方からお話を聞くと、栃木市は良い街だが、「いい街ですね」と地元の方に言うと「そんなことはない」とか、「良いところは無い」と言われるようなので地元愛を育てて行くことは大切だと思う。

○教育長

日本全体のことでもあるが、謙遜の美德がまだ残っているのが影響しているので、そういうことから脱却することが大切だと思う。今後はそういった感覚を払拭していければと思う。

○市長

自分の街が好きになる、自分の街を愛する。自信を持つことが大切だと思う。

○林委員

スポーツも文化の一部であると考えますが、スポーツの振興も文化に混ぜたほうが良いのではないかと。

また、目標に語学の充実を入れたほうが良いのではないかと。

○事務局

施策を推進していく際に、文化はとても広い領域なので、あえて分けて表示することにより推進しやすくしている。

また、語学については大綱であるため、細部の明記はせず、コミュニケーション能力の向上に語学が含まれているものである。

○教育長

目標と手段の差別化と捉えています。

○事務局

グローバル教育を推進していく中に語学も含まれている。

○大橋委員

基本方針ⅠとⅤが子供時代に大きく影響し、大切だと思う。他のⅡからⅣは追従してくるものだと思う。

不登校児童についても中学校も非常に多い。先日メールの案内で不登校について考える会の案内が来た。初めての取組かと思うが、全国に誇れる栃木市での取組とかがあればいいなと思いました。

○市長

学校生活の手段の第一歩が踏み出せない、将来に大きく影響が出るため対応しないといけないと思っている。一方で、親が不登校にさせてしまっている問題もあり、ケースバイケースで様々な対応策が必要であるため、大変難しい問題ではあるが、栃木市らしい対応策があればいいと思う。

○教育長

栃木市の不登校率は全国平均と同程度である。不登校児童も100人いれば100通りのパターンがある。どんな子も救いたいと思い、フリースクール代表者や保護者を含む情報交換会を昨年から開催し、各々の子に合った100通りの方法を模索していきたい。

○市長

コロナ禍において不登校児童の人数に変化はあったのか。

○教育長

歴然とした変化は本市では見受けられない。

○市長

教職員間で情報を共有し、少しでも少なくなるように努力をしていてもらいたい。

○教育長

一番大きな課題ととらえて対応を検討してまいりたい。

市のはばたき教室やあじさい教室での取組みが、高根沢町のひよこの家のようにどんどん変容してきている。一人ひとりの児童生徒にあった対応をしていただいている。引き続き実態に合わせてやり方を変えていかなければならないと思っている。

## (2) 運動部活動の地域移行について

○事務局

※資料により説明

○大川市長

事務局より説明がありました。皆さんから質問、ご意見をいただきたいと思えます。

○福島委員

非常に重要な問題であると思う。ただ実現可能なのだろうか。都内であれば人材がいると思うが、栃木市であるとその人材がいるのだろうか。また移行には予算・場所・指導者が必要で、それらを揃えるのは非常に大変だと思う。対価を払わないで指導者が集まってくるのは難しいと思う。移行ありきではなく、学校に指導できる指導者を派遣することからはじめていったら良いのではないか。また、今後文化部の移行もあると思うが、楽器の移動や音響の良い場所の確保も大変だと思う。これに関しても指導者を派遣する方が良いと思う。

○市長

同意見です。地方では人材確保が難しい。今後の会議で検討してもらいたい。

○林委員

ハンドボールのクラブチームが3つできたというが市の支援でできたのか。

○事務局

市の支援ではない。関係者の方が立ち上げたものである。

○西脇委員

全国大会は学校ごとではなくチームでの参加になるのか。

○事務局

現在の学校対抗の大会は、クラブチームの参加はできなくなっている。

体育連盟で来年度から、クラブチームの参加を認める検討を進めているそうである。

○市長

海外は授業が終わったら生徒と先生の関係は完全に終わり、日本もそのようになっていく過渡期になっていっているのではないかと。

○教育長

学校現場は大変な状態であると思われており、学校の先生のなり手が減ってきている。本件の部活動移行も学校の働き方改革にも貢献できるものとして、県の教育長部会でも様々な意見交換が活発に行われている。私は一朝一夕にすぐになんとかなるものではなく、10年くらいかけて少しずつ移行していく必要があると考えている。教員のボランティア精神に頼ってきた部活動を地域や社会で育てていくものにできたら良いと思う。

栃木市のように地域移行に対し、しっかり取り組みはじめている自治体は他の自治体ではあまりないため、丁寧に行っていきたいと思っている。

○館野委員

少ない生徒数の学校でやりたいスポーツの部活がない生徒にとっては選択の幅が広がると思う。ボランティアではなく報酬を支払う予算を用意したうえで指導者を見つけてもらいたい。

文化部も後からではなく同時進行でやれたらよいと思う。

○市長

指導者がきちんといるところはいい教育を受けられているが、それが難しい学校では厳しいと思う。メリットを活かせるよう、時間をかけて研究調査をしてもらいたい。

4 その他

特になし。

5 閉会